

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2441 号

Comparison of Clinical and Angiographic Outcomes After Bare Metal Stents and Drug-Eluting Stents Following Rotational Atherectomy

(ロータブレーターを使用した薬剤溶出型ステントとベアメタルステント留置における長期予後比較)

田村 浩 (たむら ひろし)

博士 (医学)

論文内容の要旨

薬剤溶出型ステント (DES) 時代においてローテーションアテレクトミー (ロータブレーター) を治療の際に併用した際の臨床効果を見た研究はほとんどない。この研究の目的は複雑で石灰化の著明な通常の治療では困難な病変に対してロータブレーター (経皮的冠動脈アブレーション術) を先行して使用した場合、その後のステント治療にどのように影響を及ぼすかをベアメタルステント (BMS) 並びに 3 種類の DES それぞれに分けて長期予後を比較することである。単施設後ろ向き観察研究で解析を行なった。順天堂医院で 2001 年から 2011 年にかけてロータブレーターを BMS 並びに DES に先行させて治療を行なった連続 406 症例を対象とした。そしてロータブレーター後に留置した BMS と 3 種類の異なる DES (SES : シロリムス溶出型ステント、PES : パクリタキセル溶出型ステント、EES : エベロリムス溶出型ステント) のそれぞれについて治療後の長期成績を比較した。平均観察期間は 4.6 年間であった。DES による治療を受けた患者はより高齢で冠動脈病変が多く (多枝病変)、病変長が長く小さい血管であった。10 ヶ月後に再造影を行なったところ BMS を留置された群は DES 群と比較して有意差を持って高い再狭窄率、晚期血管内腔消失率を有しそのため TLR (標的血管再血管再建術) を行う必要があった。総死亡率、急性冠症候群 (心筋梗塞、不安定狭心症)、TLR を含めた MACE (major adverse cardiac event : 主要有害心血管イベント) もまたロータブレーター後に BMS を留置した群 (BMS-RA) が DES 群より高い発生率であった。多変量解析後もロータブレーター後の BMS の治療は DES を使用した治療に比べて MACE 並びに急性冠症候群と総死亡の独立した危険予測因子であった。しかしながら 3 種類の DES 間では再狭窄率、晚期血管内腔消失率そして主要有害心血管イベントにおいて有意な差はなかった。

結論、複雑性高度石灰化病変に対するロータブレーターを使用したのちの DES 留置術は、BMS 留置に比較して安全で長期予後に対しても効果的な治療である。3 種類の DES 間で長期予後、安全性に関しては有意差無く同等の効果であった。